

山名

源矩豊

会誌「山名」第7号 目次

平成27年度山名会歴史講演会より		
室町文化の歴史的意義	-----	松本公一
京 応仁の乱の前と後	-----	山本義典
歴史討論「室町文化と山名氏」	-----	松本公一
		山本義典
		山名年浩
平成28年度山名会歴史講演会より		
秀吉・家康期の山名禪高	-----	伊藤真昭
平成29年度山名会歴史講演会より		
山名宗全の虚像と実像	-----	呉座勇一
山名7号発行に関して	-----	事務局
		85
		61
		42
		32
		19
		1

室町文化の歴史的意義

平成27年山名会歴史講演会第1講

池坊短期大学教授 松本公一教授

(山名会活動記録のビデオより起稿)

講師紹介 (山名年浩会長)

山名氏というのは、鎌倉・室町・江戸と三つの幕府を通して存在し得たのは、武家の中で山名氏だけなんです。そう言う中で、山名氏が果たした歴史的な意義とは何なのか？という事をハッキリさせることが、非常に大事かと思えます。

今日の最初の講師である松本公一先生は、こちら池坊短期大学の教授でいられます。同志社大学の大学院で文化史学を研究され、ご専門は日本宗教文化史、伝統文化論で御座います。

歴史学者の方のお話しは、非常に確かな史料・史実に基づいて、一体何が大事であったのかと言う点を掘り下げて頂けます。私も今回の件で数回、松本先生にお目に掛かりましたが、非常にキツチリとした方で学者として信用できるし、きつと授業も有意義な楽しい授業をなさっていると思います。それでは松本先生よろしくお願い致します。

はじめに

ただ今、過分な紹介をいただきまして、今紹介されたような形で一時間出来るかな？と、チョット不安になってきました。それで、私は今回は「室町文化の歴史的意義」という所でお話しをさせていただきます。

先ほどご紹介いただいたように、私は同志社大学の文学部：文化史学と言う他には無い名前の歴史学を今でも勉強しています。

文化史学と聞きますと多くの人は「文化の歴史をやっているんですね？」と言うような事を言われます。実はそうでは無くて、人間が作り出した物、政治であり、経済であり、宗教であり、これらは広い意味で全て文化なんです。

人間が作り出した物を対象にしながら、時代時代にどのような特徴があったのか？どういふ特徴を見出せるのか？と言うのを明らかにしていこうと言うのが文化史学でございます。

今回、山名年浩会長様との打合せの時にこんな話なら出来ると、お話しさせてもらいましたが、山名会の大会ですので、室町文化の中で山名氏はどういった事を果たしたのか？といったところを先ずお話ししたいと思います。

それに引き続き、では山名氏が生きた室町時代の文化とはどういった物だったのか？という話を続けてお話しをする流れにしたいと思います。

パワーポイントも作ったのですが、私の場合、写真とか絵です。それ以外はレジュメと適宜、板書をさせていただきたいと思います。後ろの方は見にくいかも知れませんがご容赦下さい。まずレジュメの順番にお話しをしていきたいと思います。

一、山名氏の文事

第一番目に室町時代の「山名氏の文事」と言う書き方をしました。山名氏は文化的にはどういう活動をしていたのか？と言うことですね。

山名氏といえば、どうしても応仁の乱の時の山名持豊。まあ、この人が余りにも傑出して有名なわけですね。

ところが、山名氏というのは…皆さんにお話しするのは釈迦に説法ですが、室町幕府に於いて四職の一家であった。四職と言うのは、侍所の長官を四つ

の大家家で順番にやっていく訳ですね。赤松・一色・山名・京極の四家です。当然、侍所の長官と言うことは、室町將軍と近い位置にいる訳です。

山名時熙と詩歌

山名持豊以前に山名時熙という人物がいます。室町文化の中で考える時、山名時熙という人物は無視出来ない人物なんです。

今回の事で勉強させてもらい気付いたのですが『一休』という漫画の中に山名時熙が出ているんですね。それでどういう立場で出ているかと言うと、將軍と共に幕政の合議を行う宿老の一人として描かれており。それは恐らく間違いは無い。

山名時熙という人は1367〜1435まで生きた人です。幕政にも活躍した人なのですが、後世のものになります。『山名氏系図』に次のような記述があります。

「時熙作詩及び倭歌を好む。其の詩歌世に伝ふ。」

と『山名系図』の時熙のところに明記されています。

『山名系図』自体が出来たのが、少し後の時代になるのですが、時熙と言う人物は詩歌、ここでも

京 応仁の乱の前と後

平成27年山名会歴史講演会第2講

Room to Grow 山本義典代表

(山名会活動記録のビデオより起稿)

講師紹介 (山名年浩会長)

先ほどの松本公一先生は室町時代に焦点をあてたお話しでした。室町期に現代に通じる習慣やしきたり、伝統文化と言ったものの基礎が形成されと言う事。もう一つは、山名氏が文化的にどう関わったかという、他では触れることが出来ない事柄を、史実に基づいて紹介していただきました。

次の講師の山本義典代表は、先ほどのお話とは雰囲気ガラッと変わって、退屈をしないお話になるうかと思えます。

山本氏は京都の人でして、華道美生流の美生家、春月堂香峰として、禁裏不出の華道の流れを受け継いで居られます。

また山本氏は日本文化への造詣は深いものをお持ちですが、アメリカの州立ハワイ大学・音楽学部のご卒業でして、以降、音楽やバレイ・映像等の分野を中心に活動なさいました。また、カナダ・ブリテ

イッシュュコロニア州リッチモンドの代表教育委員にも就任なさっています。

それでは山本先生よろしくお願い致します。

はじめに

後攻めの大変な事が起こりまして、松本先生のキツチリとした論理的な講演の後なのですが、私の場合は、どちらかと言うとフィーリングでお話しをしてきたいと思えます。講演時間は一時間以内、スタッフからは原稿を書いたのだからアドリブではやるとキツク言われて居ります。どういう形で話が進んでいくかは分かりませんが・・・お付き合いください。

今日の講演、私としては山名氏については門外漢で、そこには深く触れられない分、その代わり持つて帰って貰いたいものが二つあります。それは話として、言葉として余り知られて無いことかも知れません。まずは皆さんと一緒に絵を見ながら、想像し

山名第7号 サンプル

ながら、共に歴史を考えて見たいと思います。



応仁の乱 略図

応仁の乱の出発点

そもそも応仁の乱とは何やったんや？山名会の皆さんは応仁の乱がどういった経緯で起こったかは大体分かっておられると思います。先ほどの松本先生のお話とかなり重複した内容もあるかと思いますが、先生のお話も思い出しながら、この地図上で私と共に歩いてみて下さい。

応仁の乱は文献によれば10〜13年続いたとか？皆さんはこの戦いはどんな戦いだと思いますか？

例えば宇治川の戦いなどは、軍勢が川を挟んで東西で向かい合い、誰に当たるかわからない状態で弓を45度の角度で打ち合って戦いが始まるのです。応仁の乱と言うのはこの地図をご覧ください。

山名・細川の屋敷は堀川通りを挟んで歩いて5分ぐらいの距離、この近い距離で戦うんです。細川勝元の弟を攻めて応仁の乱が始まるという一説、その前に、足利将軍が殺されます。畠山氏で家督争いが起こり、御霊神社で戦が始まったのを応仁の乱という方もあります。日本の歴史の枠の中で、応仁の乱とは何処に位置するものなのかは後ほど説明します。山名邸から細川邸を攻め、天皇や公家、細川方は花の御所に入る。花の御所は1〜2丁角程の狭さ、御構(おんかまこ)という土塁を築き、砦として、山

歴史討論 「室町文化と山名氏」

平成27年山名会歴史講演会

池坊短期大学教授 松本公一教授

Room to grow 山本義典代表

全國山名氏一族会 山名年浩会長

(山名会活動記録のビデオより起稿)

はじめに

(山名年浩会長)

それでは歴史討論会を始めさせていただきます。最初に御講演の池坊短大の松本公一先生、まさに室町時代を中心にお話いただきました。近代史の歴史学者は多いのですが、時代が古くなるほど研究される歴史学者は少なくなると言うことです。そしてまた古文書を読むのも、時代を遡り古くなればなるほどに解読が困難になって来ますが、色んなご苦労が有るなか、綿密に証拠をあげて歴史学者らしい素晴らしい講演をいただきました。

「室町文化の歴史的意義」と言う講演の中で初めて目にする資料も示していただき、室町時代に形作られた文化が、現代に伝わる伝統文化の原型になっ

ているとのご指摘が有りました。これが一番重要なところかと思います。

続きまして山本義典代表は、応仁の乱の前と後で京都がどのように変わったかと言うことに焦点を当ててお話しいただき、的確に図示された資料も示していただきました。また、応仁の乱と祇園祭の関わりについてもお話しいただきました。

お二人の御講演を聞いて、山名氏一族会としてどのように感じられたか、意見を出していただけだと思いますが、まず宮田靖国副会長様お願い致します。

「明德の乱」と「大日本資料」

(宮田副会長)

これは討論会の質問にはならないのですが・・・

山名第7号 サンプル

「山名氏は欲得だけで正義が無かった」と言われることが良くあるのですが、これは誠に心外な事でして、私は山名ほど自分を犠牲にして朝廷に忠義を尽くし、滅亡の淵から救いだした一族はなかったと考えています。

何故かと言いますと、余り知られていないことであります。足利義満の頃に天皇家（後円融天皇）が存亡の危機に立たされていた事が有り、この危機を乗り越えるために山名氏は明德の乱を起こして、それを阻止しようと試みたと私は考えて居るんです。

足利義満により天皇家が存亡の危機に立たされていたなどと言うこと自体、畏れ多い事で誰も触れたがらないところだと思っておりますが、その辺りにところを東大史料編纂所の「大日本史」で確認しようと思っておりますが、その部分は未稿で全編完成まで600年かかると言われるのです。ひょっとしたら朝廷の危機などに関する畏れ多い箇所は、敢えて避けて通って居るようにも思えるのです。

後円融上皇は院政を引き治天の君として君臨していたのですが、三条公忠が著した「後愚昧記」によれば、足利義満が上皇を配流にすると言う噂が流れ、ある日、後円融上皇の元に義満の使者が来た折りに、上皇は使者を配流の為によこされた者だと思い込んで、持仏堂に籠もって切腹しようとした騒ぎがあった。



歴史討論の登壇者方

山本代表（左）・松本教授（中）・山名会長（右）

元々、足利義満は天皇家が無ければ室町幕府は安泰と思っていた。実際に後醍醐天皇の例を見ても、

秀吉・家康期の山名禅高

平成28年山名会歴史講演会

華頂短期大学 伊藤真昭教授

(山名会活動記録のビデオより起稿)

はじめに

ただ今ご紹介に預かりました華頂短期大学歴史学科の伊藤真昭です。本日は全国山名氏一族会の総会に当たりまして、ご盛会誠に御めでとうございます。この全国山名氏一族会の講演にお招きいただき誠に光栄に思っております。

私自身はプロフィールにありますように、豊臣政権下の京都のお寺について研究してきた訳でございまして、今まで色々な史料を見ている中で「禅高」という名前はよく見てはいたのですが、今回テーマを与えていただきまして、一度じっくりと山名禅高さんについて調べてみる機会を与えていただき、ありがとうございます。

今回、色々と調べてみたのですが、先ずは禅高について今までどういった研究があるのかといったところから話をさせていただきます。本日の会場受付でもおいてあります『山名豊国』という冊子がございます。

います。この冊子は今から40年以上前の昭和48年3月に刊行されています、小坂博之さんという方が執筆されたのですが、非常によく調べられている本で、今日の私の話というのは、このご本にどれだけのものを付け足せるかなという程度でございます。既にこの本の中で非常に詳細に禅高の生涯について書いていただいていますので、このご本をベースに話をさせていただくこととなります。小坂先生が執筆されていた頃にはまだ見られていない史料等を今の私たちは見ることが出来ますので、そういった史料を補足したり訂正したりしていきたいと思いますが、大筋の流れとしては、殆どこのご本の中に尽くされていると思います。

この『山名豊国』ですが、古本屋で買った時の値段が4500円でしたが、山名会では3000円で販売しています、1500円高く買ってしまったかもしれません。お買い得でございますので皆さんも今日宜ければお買い求めください。

さて、小坂先生のご本の中のはしがきにもこのように書かれています。「なお、山名氏が本領但馬を中心として、中世後期二百数十年余にわたり、周辺諸国に残した政治経済的、文化的、あるいは血縁的影響・意義は非常に大きい」次からが大事な所ですが、「しかし、その史料は殆ど煙滅・散逸し、室町期に成った『太平記』『明德記』『応仁記』などのいわゆる『戦記物』、その他史書、系図の類も必ずしも実体を伝えず、それらを基として著された近世の『史誌類』にいたっては、さらに良質な物とはいえず、これらを利用するためには、より良質の『当事者発券のいわゆる『古文書』、同時代人の日記いわゆる『古記録』類の一・二等史料―史料によって孝証しなす必要がある」と、このように書かれています。

私もこの姿勢に従って、江戸時代に作られた編纂史料は使わずに、同時代の人が書いた日記や古文書のなかに、どういったことが山名禅高について記されているのかというのを見ていきたいと思っています。ですので、非常に断片的にならざるを得ません。小坂先生もいわれているように、山名氏に関する史料が非常に少なく、色んな所に散逸しています。それらを全て網羅するのは困難ですので、本日のお話の範囲でご容赦願いたいところです。

それでは本日の使用史料の確認ですが、文章レジ

ユメが裏表のコピーで2枚ございます。それから、史料レジュメが裏表で1枚ございます。全部で3枚の資料があるかご確認ください。文章レジュメに従って進めさせていただき、適宜史料の何番をご覧くださいと申し上げますので、どちらも合わせてご参照いただければと思います。それでは本題に入ります。

今、申し上げましたように山名禅高さんという方が、信長・秀吉・家康期におられました、生き残って山名家そのものを伝えられました。その方についての研究は小坂博之先生の『山名豊国』という本に生涯にわたって記述されており、色んな史料を駆使して記述されており、山名豊国研究については今でもこの本がベースになるかと思っています。

もう一つ先行研究としては東京大学史料編纂所や国学院大学で教鞭をとられた桑田忠親先生が、「お伽坊主山名禅高」(『大名と御伽衆』)という文章を書かれています。このご本は出家して「お伽坊主」になつてからの山名豊国の記述でございます。記録に出てくる色んなエピソードを散りばめて文章を書かれています、本日はそういった記録やエピソードは使用いたしません。

ここで問題点としては、先ほども申し上げたように豊国に関する同時代の史料が非常に少ないという

平成29年山名会歴史講演会

山名宗全の虚像と実像

国際日本文化研究センター 呉座勇一先生

(山名会活動記録のビデオより起稿)

ただ今ご紹介に預かりました呉座です。この度は山名会講演会でお話しさせていただくということで、大変に光栄に思っております。本日は「山名宗全の虚像と実像」という演題で応仁の乱と山名宗全の関りについてお話したいと思ひます。

山名宗全のイメージ

さて、山名一族と言いますと、一般的に一番有名なのは山名宗全だと思います。山名宗全というのは皆様ご存じのように、応仁の乱。応仁の乱は東軍と西軍に分かれて戦ったのですが、東軍の総大将が細川勝元、西軍の総大将が山名宗全ということになります。宗全は本日の会場があるこの西陣辺りに陣を構えて戦ったということになります。

そんな山名宗全ですが、実は宗全が活躍していた室町時代やその後の戦国時代のもので宗全を描いた肖像画というのは残っておらず、江戸時代以降の物しか残っていません。

では、実際にどんな物が残っているかと言いますと、これは『山名宗全細川勝元確執之図』(図1)という錦絵で、そこに山名宗全が描かれています。鳥取市の歴史博物館が持っている応仁の乱に関する錦絵です。実は私、(平成29年)11月に鳥取で講演したのですが、その時に鳥取市歴史博物館の方とお話ししたのですが、最近この絵の問い合わせが非常に増えていて、写真を使わせてもらえないかと

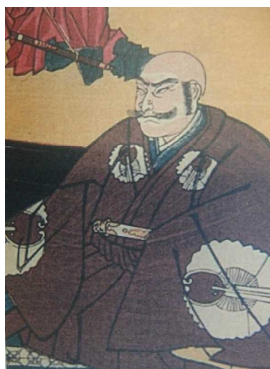


図1 山名宗全細川勝元確執之図
(鳥取市歴史博物館蔵)



図2 『本朝百人武将伝』
(国立国会図書館蔵)

いう問い合わせが沢山有って、急に有名になったということです。

もう一つは、これも江戸時代のもですが、国立国会図書館が持っている『本朝百人武将伝』(図2)とあって、つまり日本の有名な武将を百人集めて、その人たちの紹介や説明をしている本ですが、その日本を代表する有名な武将百人の中の一人として、山名宗全が選ばれていて、宗全の絵が描かれています。

しかし、何れの絵も江戸時代に描かれたもので、山名宗全その人本人を見て描いたものではないので、当然、想像で描いているのですが、江戸時代の人から見ても山名宗全という人は非常に強面な、ちよつと悪い感じの人というイメージであったことが分かるかと思えます。

『塵塚物語』の逸話「山名宗全、或る大臣と問答の事」

そのほかに、宗全の人物像を物語るエピソードとして有名なのは、お手元の資料の最初のページに載せましたが、『塵塚物語』という史料に書かれたものです。戦国時代の天文21(1552)年に作られた本なので、これも応仁の乱の勃発から90年近く経ってから書かれた本ですが、全6巻65話の一番最後に山名宗全に関するエピソードが載っています。

それは、「山名宗全、或大臣と問答の事」というエピソードですが、

「山名金吾入道宗全、いにし大乱の比をひ、或大臣家にまいりて、当代乱世にて、諸人これにくるしむなど、さまざまものがたりして侍りける折ふし、亭の大臣ふるき例をひき給ひて、さまざまかしこく申されけるに、宗全たけくいさめる者なれば、臆したる気色もなく申侍るは、『君のおほせ事、一往はきこへ侍れど、あながちそれに乗じて例をひからせらるる事しかるべからず。凡そ例といふ文字をば、向後は時といふ文字にかへて御心えあるべし。それ一切の事はむかしの例にまかせて何々を張行あるといふ事、此宗全も少々はしる所也：(中略)凡そ例と云は其時が例也。大法不易、政道は例を引て宜しかるべし。其外の事、いささかにも例をひかるる事心えず、一概に例になづみて、時を知らざるゆへに、あるひは衰微して門家とぼしく、あるひは官位のみ競望して其知節をいはず、此くの如くして終に武家に恥かしめられて、天下うばはれ媚をなす。若しみて古来の例の文字を今沙汰せば、宗全ごときの匹夫、君に對して此く

山名第7号 サンプル